

P-415

緩和ケア院内登録看護師の患者のつらさに関する看護記録向上への取り組み

松江赤十字病院

○小笠原愛子、奥原 慶子、川上 和美、小林 沙央

【はじめに】当院では、2008年より臨床看護において役割モデルとして活躍し、看護実践のレベルアップへの貢献をめざして院内登録看護師制度を設け、現在緩和ケア領域は2名の院内登録看護師が活動している。院内登録看護師は、所属部署の看護師が生活のしやすさに関する質問票(以下、質問票)を用いて、患者のつらさをスクリーニングし、基本的緩和ケアを実践し、実践を看護記録に残すことを推進している。しかし、つらさの数値は記載してあるものの具体的なつらさの内容や実践が記載してある記録は少ない。そこで、所属部署の看護記録を分析し、つらさの記録について勉強会を実施したので報告する。

【活動内容】1)2022年5月に院内登録看護師が所属する2部署において、質問票で気持ちのつらさ6以上または身体つらさ2以上であった患者の看護記録を調査した。調査内容は、つらさの看護記録の有無、具体的なつらさの内容、アセスメントを含む対応とした。

2)1)の調査内容を分析し、8月につらさの記録について勉強会を実施した。勉強会では患者のつらさや看護師のアセスメントが具体的に記載されている看護記録を示した。3)2022年11月に1)と同様の調査をした。

【倫理的配慮】所属する看護部の承認を得た。
【結果と課題】5月は、36件中看護記録があったのは29件でつらさや対応が記載のあったのは19件(63%)であった。11月は、27件中看護記録があったのは21件で、すべてつらさや対応の記載があった。記録のなかった6件は勉強会を受講していない新規配属看護師の記録であった。以上のことから、所属部署の看護記録の傾向を分析しての勉強会は効果があったと考える。今後は、新規配属看護師への周知が課題と考える。

P-417

A病院における高齢者ケア院内登録看護師の活動～心臓血管センターの取組み～

松江赤十字病院

○森脇 敦子、高井 知美、金坂 桂子、内部 孝子、齋藤 涼子

【はじめに】A病院心臓血管センターは、狭心症や心筋梗塞などの検査や手術目的の患者が多く、中には緊急で入院する場合もある。患者は70～80歳代の認知症のある人も多く、環境の変化や高度な治療を受けることで、せん妄を発症する患者も増加していた。そこで、2021年から院内で開始された高齢者3D(認知症・せん妄・うつ)ケアコース研修を受講し、受講後に高齢者ケア院内登録看護師の認定を受けた1名の看護師を中心に、病棟看護師全体で患者の情報を共有し、対応するための活動を開始した。その活動について報告する。

【目的】高齢者ケア院内登録看護師の活動を可視化し、成果及び課題を考察する。

【倫理的配慮】所属する看護部の承認を得た。

【活動内容と成果】病棟看護師が、患者の認知機能や対応を共有するための高齢者カンパレンス(以下、CF)を定期的に実施することを計画した。CFでは、情報共有や対応に加えて認知症ケアチーム(以下、DCT)への相談の必要性を吟味し、その結果でDCTに相談した。また、病棟看護師が、認知症やせん妄の知識をもち患者に対応できるように勉強会や事例検討会を行った。その結果、DCTに相談した患者は、2022年4月～12月で18名(前年度比較3.6倍増)となった。この取り組みについては看護部アンケートでは、認知症やせん妄に対する認識が向上したことが分かった。

【今後の課題】2023年度は院内登録看護師を増やすと共に、病棟内の高齢者看護チームを立ち上げ、引き続き、高齢者への看護実践の向上を目指し、部署全体で取り組んでいきたい。

P-419

特定行為研修修了者(術中麻酔管理領域)への活動支援

旭川赤十字病院¹⁾、旭川赤十字病院 麻酔科²⁾

○西澤 佳代¹⁾、森田 翔¹⁾、阿部 昌江¹⁾、千代 慶子¹⁾、脇田美穂子¹⁾、杉山 早苗¹⁾、四十物摩呼²⁾、小林 巖²⁾

【目的】A病院は救命救急センターを有しドクターヘリ基地病院として広域な3次医療圏をカバーしている。フライト業務、救急外来、ハイケアユニットの患者対応と年間約3750件の手術麻酔を12名の麻酔科医師が担っている。手術室では2022年4月から特定行為研修修了者(術中麻酔管理領域)が1名活動している(以下特定看護師とする)。手術室師長の立場から特定看護師の1年間の活動内容と特定看護師への支援内容を振り返り今後の課題を考察する。

【方法】活動報告書から特定看護師の活動と麻酔科医師のベネフィットを調査し、活動への支援を振り返った。(倫理的配慮)活動報告書の個人情報には秘匿し記号化したものを使用した。

【期間】2022年4月から2023年3月

【結果】特定看護師は麻酔科管理手術150例を担当した。麻酔科医師は特定看護師の活動により、術前・術後診察及び食事時間の確保、緊急患者対応ができた。特定行為に関する告知と同意は病院の「特定行為研修管理委員会」で決定した。特定看護師の活動は麻酔科部長と手術室師長が相談の上、火・水・金曜日としたが、本人と調整し年間102日の特定行為活動日確保した。特定行為以外の日は手術室看護師として勤務し、平均月3回夜勤に従事した。また、8週間の育児休暇を取得した。

【考察】A病院の体制は日本麻酔科学会「麻酔関連業務における特定行為研修修了看護師の安全管理指針」に準じたものになっており、病院全体で特定看護師を支援している。現場で特定看護師を円滑に活用するためには師長が本人・手術室看護師・麻酔科医師の要望を聞き調整することが重要である。麻酔科医師と特定看護師の負担軽減に向けて特定看護師を更に複数育成することが今後の課題である。

P-416

A病院における高齢者ケア領域院内登録看護師の育成

松江赤十字病院

○藤江 いくこ
○藤原 孝子、佐野英津子、梶野 好美、内部 孝子、齋藤 涼子

【はじめに】2008年よりA病院では院内登録看護師制度を設け、臨床看護において役割モデルとして活躍し、臨床看護実践のレベルアップを目指せる人材を育成している。制度は、認定・更新制とし、認定は定められた院内外の研修受講、更新は活動を可視化することで質の担保を図っている。高度急性期病棟のA病院に入院する高齢認知症患者は年々増加しており、看護師が自信をもって看護実践が行えるよう、2021年より高齢者ケア教育プログラム「高齢者3D(認知症、せん妄、うつ)ケアコース」を企画し、高齢者ケア院内登録看護師(以下、院内登録Ns)の育成を行った。これまでに2年間の成果について報告する。

【目的】院内登録Nsの人材育成をすることで、部署の高齢者ケア看護実践の質の向上に向けた支援が出来る。

【倫理的配慮】所属する看護部の承認を得た。

【活動内容と成果】高齢者看護領域の専門・認定看護師が、2021年から高齢者3Dケアコース研修を企画開催した。研修内容は基礎・応用・認定の6コース(各1単位90分)で設定し、看護実践に活かせる内容で検討した。2年間で参加者は72名、その中で院内登録Nsが7名誕生した。そして、2022年より高齢者ケア院内登録看護師会が発足し、院内登録Nsは部署の役割モデルや専門性の高いケアを提供できるような活動を開始し、部署のケアの課題を抽出して改善策の検討や実践、部署内外で教育活動を行っている。

【今後の課題】今後も、院内登録Nsが部署内外で高齢者ケアの質の向上に向けた取り組みができるよう、専門・認定看護師との連携・協働が課題である。

P-418

エピペン講習に関わるアレルギー疾患療養指導士(CAI)のストレスコーピング

芳賀赤十字病院

○馬込菜津美、菊池 豊、柳澤 仁美、小山こずえ、深谷 亜矢

【目的】CAIは専門知識と指導スキルを兼ね備えたコメディカルスタッフである。現状では知識の習得度の確認が認定基準となっており、指導スキルへの対応は充分とは言えない。学校で行うエピペン講習を用いて指導スキル獲得の問題点を明らかにする。

【方法】当院CAIに対しエピペン講習前にアンケート調査を行った。調査項目は、職務期間、アレルギー関与期間、CAI取得期間、知識10項目:食物アレルギー(1型アレルギーの機序、症状、治療)、アナフィラキシー(定義、症状、治療、血圧低下時の対応)、エピネフリン理解(作用機序、副作用)、講演スキル5項目(服装、講演経験、準備、話し方、ジェスチャー)、性格4項目(頭痛、不眠、他人の言動、イライラ)、ストレス度6項目(知識、講演、反応、話し方、不眠、動悸)とした。同様のアンケート調査を実際のエピペン講習直前、終了直後にも施行した。

【成績】CAI看護師Nrs6名、管理栄養士Nut6名。職務期間の比較では、知識(Nrs3.33±0.35、Nut3.35±0.16)、ストレス(Nrs3.7±0.074、Nut3.9±0.22)とも有意差なし。ストレスとの相関係数Rは、職務期間R=0.49、性格R=0.46、知識R=-0.65(p=0.023)。知識とのRは、職務期間R=0.43、アレルギー関与期間R=0.54。実際のエピペン講習直後のアンケート結果との比較は当日見逃す。

【結論】1.エピペン講習前のCAIに対してアンケート調査を行った。2.職務期間の違いは認めない。3.知識とストレスには有意な負の相関がありエピペン講習前に更に知識の確認が必要である。4.経験豊富なCAIの方が知識の習得度が低いと感じていた。5.調査を参考にストレスなくエピペン講習を実施できるようエピペン講習シミュレーションを行っていく。

P-420

当院のPICC(末梢挿入式中心静脈カテーテル)チームの現状

名古屋第二赤十字病院¹⁾、名古屋第二赤十字病院 麻酔科²⁾、
名古屋第二赤十字病院 救急科³⁾、名古屋第二赤十字病院 消化器内科⁴⁾、
名古屋第二赤十字病院 心臓血管外科⁵⁾

○松原 章恵¹⁾、坂本 英至¹⁾、水谷 早希²⁾、水野 皓介³⁾、
山田 智則⁴⁾、加藤 亙⁵⁾

【はじめに】当院では、現在3名の診療看護師(以下NP)が各診療科で業務に従事している。従来中心静脈カテーテルの挿入は、各診療科の医師により実施されてきたが、多忙な業務量のタスクシフティングの一環として、NPがその業務を担うことが望まれた。そこでNPを中心とした特定行為修了者を含めて、末梢挿入式中心静脈カテーテル(以下PICC)挿入チームの創設に至る。

【目的】当院のNPにおけるPICC挿入の現状を報告する。

【方法】PICCチーム創設以前の2022年7月から2023年6月までのNPのPICC挿入時の合併症について検討した。

【結果】件数は33件であり、挿入時に縦郭穿破、気胸、動脈穿刺、神経損傷などの大きな合併症はなかった。

【考察及び結論】当院におけるNPによるPICC挿入は大きな合併症なく実施できているが、件数は少ないのが現状である。3名中2名は卒業3年程度研修病院で修練を積んでおり、PICC挿入に関して十分な経験があった。しかしながら、チーム創設にあたり、安全性の担保のため、医師と30件以上の実施と患者の基準「循環と呼吸が安定していること」「循環と呼吸が不安定な場合は医師の付き添いを必須とすること」「鎮静なく手技中に安静が保持できる小学生以上であること」を設けて実施することになった。2023年7月よりPICCチームが始動となり、これが医師のタスクシフティングの一助となりうることを期待して第一報とする。